

〈研究ノート〉
【研究紹介】

アナ・ボウジョン

「すべての名前：アイデンティティ、民族、国家」を読み解く

Lermos ben sobre “Todos os nomes: identidade, pobo, país” de Ana Boullón

浅 香 武 和

はじめに

スペインのガリシア自治州の公用語はガリシア語である。戸籍簿 *Registro Civil* には、当然のこどくガリシア語で記載されている。ガリシア移民の子であるキューバの Fidel Castro フィデル・カストロ、ガリシア文芸復興の立役者 Rosalía de Castro ロサリーア・デ・カストロ、我が留学時代の友人 Ramón Castro ラモーン・カストロのように Castro はガリシア固有の名字である。起源を探ると、三世紀のガラエキアの時代 *ciclofilia* (円形の建物) が多く存在していた。その後、ラテン語 *castrum* からガリシア語の *castro* になった。ガラエキア時代の前ローマの先住民族 (ケルト・イベロ族) の住居の形を示すものである。当時、ガラエキアでは約 600 のカストロが存在していた。Ramón Lorenzo 教授によると 9 世紀から Castro の地名が現れ、1218 年に名字として Pelagius Castro が最初に確認される。

小論は、このような特異な名字が存在するガリシア人の名字についてアナ・ボウジョン氏のガリシア学士院入会基調講演 2021 年 12 月 11 日「すべての名前：アイデンティティ、民族、国家」の趣旨を纏め考察を加えたものである。講演内容と刊行物 (Boullón: 2021) は同一である。

I ガリシアの名字50傑

ガリシアで最もよく使われる名字をあげてみる。INE (Instituto Nacional de Estadística, 2000) スペイン国立統計局より (カッコ内は人数)

1: Rodríguez (236,658). 2: Fernández (223,899).
3: González (173,985). 4: López (167,768). 5:
Gracia (156,909). 6: Pérez (126,873). 7: Martíns/
Martiz/ Martínez (113,431). 8: Vázquez (101,795).
9: Álvarez (80,686). 10: Gómez (69,431). 11:
Castro (60,676). 12: Igrexas/ Iglesias (56,159). 13:

Díaz (50,589). 14: Sánchez (49,958). 15: Branco/
Blanaco (46,121). 16: Afonso/ Alonso (43,668). 17:
Varela (43,264). 18: Outeiro/ Otero (42,666). 19:
Domínguez (41,584). 20: Rei/ Rey (35,754). 21:
Suárez (32,087). 22: Lourenzo/ Lorenzo (29,261).
23: Piñeiro (25,267). 24: Pereira (24,227). 25:
Vidal (23,434). 26: Méndez (22,734). 27: Núñez/
Núñez (21,205). 28: Barreiro (20,861). 29:
Romeu/ Romero (20,085). 30: Estévez (19,650).
31: Lago (18,908). 32: Santos (18,353). 33: Paz
(17,695). 34: Souto (17,323). 35: Ferreiro
(17,272). 36: Ramos (16,499). 37: Ribas/ Rivas
(16,278). 38: Vilar/ Villar (15,806). 39: Pena
(15,783). 40: Villa (14,888). 41: Pazos (14,812). 42:
Airas/ Arias (14,688). 43: Preto/ Prieto (14,566).
44: Silva (14,183). 45: Freire (14,114). 46: Torres
(14,102). 47: Conde (13,908). 48: Mosqueira/
Mosquera (13,834). 49: Calvo (13,494). 50: Xil/
Gil (13,085).

これら 50 のうち、23 の名字は父親の名にちなんだ *patronímico* (Rodríguez, Airas... etc.) であり、14 は地名に由来するもの *toponímico* (Castro, Souto... etc.) であり、7 つは渾名 *alcume* から派生した (Calvo, Preto... etc.) ものである。残りの 6 つは由来が議論される (Varela, Romeu... etc.) 名字である。名字はガリシアに特有なものと、カスティーリャとポルトガルに共有されるものもある。共有するものには、Rodríguez, López, Gómez, Díaz, Suárez, Calvo などである。1 つはガリシアに固有なものであるが、ポルトガル、アストゥリアス、レオンに共通な Fernández がある。とくにポルトガルと共通なものに Vázquez, Piñeiro, Pereira, Méndez, Santos, Pazos, Silva がある。カスティーリャ起源の名字は 140 位に Hernández (4,798 例) がある。350 位に

Montoya (2,083 例) がある。ガリシアでこの 2 つのカスティーリャの名字が使われているのは、ロマニ族 (ジプシー) との関連性があると考えられる。スペイン中央から南部に由来するカレーカレ (ジプシー) のグループによるものである。

上位 12 の名字は大部分がカスティーリャ語化されている。すなわち *Martíns, Martiz* → *Martínez*, *Afonso* → *Alonso*, *Outeiro* → *Otero*, *Romeu* → *Romero*, *Airas* → *Arias*, *Mosqueira* → *Mosquera* である。起源が比較的新しい *Iglesias* の場合はカスティーリャ語の形態が使われているが、一方ではガリシア語化された *Igrexas* が多くの人々に使われている。このような状況であるが、戸籍簿においてはカスティーリャ語化された名字を本来のまたは古い形態に回復する手続きがすすめられている。

1 位から 50 位の名字は良く使われているが、使用者数が減るにつれて、多様化が始まり 10,000 人以下のガリシア人の名字が何千もある。さらに 500 人以下の極めて少ない名字も増えている。ガリシ自治州の人口は、現在約 277 万人で主要な名字は 1,500 あり人口の 90% を占めていることがガリシア学士院の報告にある。(RAG: 2016)

ガリシア人の名字の多様性を保護し、個人の家族の歴史的コンセンサスを満たす目的で、戸籍簿が父方の名字の代わりに母方の名字を最初に置くようにするか、複合名字として受け継いだ 2 つの名字を結合するか住民に許可をあたえ、選択の自由をさせることである。すべては、先祖から受け継ぎ、そして根絶の危機にある名字を個人的な関心により取り戻すことである。

II ガリシア人の名字分析

現在のガリシアでは、名字は同名を避けるために人名に第二の形式を付加した中世期に遡る。名字のタイプを三種類に分けて以下の通り分類する。Boullón (2021:33-36)

①のタイプは父の名前を付けることである。普通、形態論的に属格か所有格を付加する。この方法はガリシアでは、10 世紀に現れ 11 世紀に広まる。例えば、Mendo の息子の場合は、語尾に *-ez* または *-es* を付加して *Vasco Méndez* のようになる。このシステムが最も頻繁であり、今日、多くの名字がこの形式をとっている。Rodríguez,

Fernández, González など。

②のタイプは、地名をつける場合である。基本的には、出生地または居住地を示す。この場合、地名に前置詞 *de* を結合させる。*de o Pico* → *Dopico* 角または峰, *de a vila* → *Davila* 村または町, *de o val* → *Doval* 谷, *de o pazo* → *Dopazo* 屋敷、などである。

③のタイプは人物の特徴を示す渾名をつける方法である。*Branco* 白い, *Preto* きつい、黒い、けちな, *Calvo* 禿げた, *Salgado* 塩辛い、機知のある, *Garrido* 美しい, *Vello* 老いた、などである。このタイプの名字には職業と役職を区別している。職業に *Ferreiro* 鍛冶屋, *Mariño* 水夫, *Monteiro* 勢子, *Fariña* 粉屋, *Freire* 修道士, *Abade* 修道院長, *Besteiro* 弩手 (おおゆみしゅ)。役職に *Conde* 伯爵, *Cabaleiro* 騎士, *Fidalgo* 郷士。

中世後期に確立したこの体系は、16 世紀から変化していった。というのは、父称を表すのを憚るようになる。接尾辞を伴う父称の添え名は時代遅れのものになり、意味を持たなくなった。そして第二の名前、すなわち名字は世襲的に使われていく。こうして中世後期に男性の名前で最も多い *Rodrigo* が、現代で最も多い父称の名字 *Rodríguez* の起源になった。

ここに 15 世紀の人名 1~25 をあげる。7,300 名を対象とする。Instituto da Lingua Galega, Sección de Onomástica (ガリシア語研究所固有名詞研究部資料)。その人名に対応する 21 世紀の名字をあげる。(Boullón 2021:34)

1: *Johán* → 93. *Yáñez* (*Anes, Oanes*). 中世期 1 位の人名 *Johán* は、21 世紀には名字として 93 位になったことを表している。カッコ内は現代の表記およびカスティーリャ語化した姓。

2: *Afonso* → 16. *Afonso* (*Alonso*), 3: *Pedro* → 6. *Pérez*, 4: *Fernando* → 3. *Fernández*, 5: *Gonzaluo* → 3. *González*, 6: *Rodrigo* → 1. *Rodríguez*, 7: *Álvar* → 9. *Álvarez*, 8: *Gómez* → 10. *Gómez*, 9: *Vasco* → 8. *Vázquez*, 10: *Diego* → 13. *Díaz* / 87. *Diéguez* / *Díez* / *Díz*, 11: *Lopo* → 4. *López*, 12: *Arias, Airas* → 42. *Arias*, 13: *Martiño* → 7. *Matínez* (*Martís*), 14: *García* → 5. *García*, 15: *Estevo* → 30. *Estévez*, 16: *Domingo* → 19. *Dmínguez*, 17: *Jácome* → 順位

なし Jácome (Xácome), 18: Lourenço → 22. Lorenzo (Lourenzo), 19: Nuno → 27. Núñez (Núnez), 20: Sueiro → 21. Suárez / Sueiro, 21: Loys → 順位なし Lois, 22: Francisco → 52. Francisco, 23: Gil → 23. Gil (Xil), 24: Mendo → 18. Méndez, 25: Payo → 21. Paz / 54. País / Páez.

16世紀からガリシア語は書き言葉において文書による言語として衰退したとき、かなりの部分の名字が変えられ、カスティーリャ語の音声的または形態的干渉を被った。ILG (ガリシア語研究所) に保存されている1566年の登記簿には Margarida Alfonso の娘は Francisca Afonso のように記されている。

こうした強制的なカスティーリャ語化は、今日のガリシアの名字のコーパスにかなりの形態が記されている。統計的には20%に及ぶカスティーリャ語の形態がある。カスティーリャからの移入者は反映されてないが、移民を多く排出したガリシアでは時代と場所により名字の強制変更があった。これを ‘onomastic colonialism’ 「人名の植民地主義」または ‘political onomastics’ 「人名政策」と呼んでいる。これは実際の言語政策であった。書記法はつぎのようである。ガリシア語における音声的な変更がある。すなわち、歯齶音の有声音化の欠如、唇歯摩擦音 /v/ と両唇閉鎖音 /b/ のあいだの音韻的な差異をなくしたことである。人名の語はカスティーリャ語の書記法体系に移り変わり、「音声革命」と呼ばれるようになった。Boullón (2021:36)

間接的な影響は2つの言語の相似性によりさほど重大なものではなかった。しかし、音素 /ʃ/ (fricativo postalveolar xordo 後部歯茎無声摩擦音または prepalatal fricativoxordo 前部硬口蓋無声摩擦音) には直接に影響を受けた。すなわち Xosé [ʃose] ショセ → José [xosé] ホセ、である。この Xosé はガリシアでも多い男の名前であり、愛称には Pepe, Piño, Pin, Pucho, Xepe, Seso, Xosiño, Sesé などがある。さらに、中世ガリシア語に存在していた歴史的書記法 <g+e, i> と書記素 <j> は、カスティーリャ語では異なる意義をもった。次のような名字 Gestal 功績, Girádez 回転, Juncal 藺草 (イグサ), Janeiro 一月、などはガリシア語には存在しない軟口蓋無声摩擦音 /x/ と

して発音されるようになった。Xestal エニシダ 群生地, Xirádez 旋回, Xuncal イグサ群生地, Xaneiro 一月、である。さらに音声的、形態的特徴を示す変更がなされた。すなわち、Seixas 小石 → Seijas, Goiáns ゴイアン市の → Goyanes, Bustabade 修道院長の胸像 → Bustabad, Souteliño 栗林 → Souletino などである。またガリシア語固有の人名表記が禁止され、カスティーリャ語と同意の表記になった例もある。Bieito → Benito, Outeiro → Otero, Afonso → Alfonso, Tareija → Teresa などがある。

1982年標準ガリシア語が制定され、民法により規定され公式にガリシア語の表記が認められた。しかし、慣習により身分証明書には、例えば Martínez という表記が使われている。ガリシア語の正しい表記 Martís は、村社会のなかで渾名(釣り人)として使われている。同様に Outeiro 小山 → Otero, Pretas きつい、黒い → Prieto などがある。公式の名前と現実の名前が対立している現況である。ガリシア人たちは日常生活ではガリシア語の名前を使い、公的機関や教会ではカスティーリャ語化された名前を使用している。

III 名字の標準語化のための規則

ガリシア語の正書法・形態と語彙の標準化のための規則は Normas 『ガリシア語の正書法と形態論の規則』(1982, 改訂2003) と VOLGa 『ガリシア語の正書法の用語集』(2004) に定められている。とくに人名と名字については、正書法と形態の正常化のために規則を正しく考慮されるべきである。一般的な基準は現行の規則を採用し、語の分節とアクセントの置き方と同様に書記法に留意すべきである。人名は共通の語彙ほど厳格ではない。地名には長い時代にわたって定着した音韻形態論上の変種を維持するための方策も設けられている。その結果、音声的な回復も外部の影響もない観点において多様性は尊重された。詳細は Boletín da Real Academia Galega 『ガリシア学士院年報』 Núm.370 (2009), pp. 117-152. に明記されている。

1. 標準語の規則に対応する書記素の採用

1.1 現在の書記素の使用

・書記素 <j> または <g+e, i> の場合は <x> を

使用する。これは中世期に使われた名字 Feijoo, Arújo, Jestoso Janeiro, Justo, Tojo, Juízo は Feixoo, Araúxo, Xestoso, Xaneiro, Xusto, Toxo, Xuízo に改める。同様に旧書記法の場合も <x> に改める。Tejero → Teixeira, Jiménez → Ximénez, Seijas → Seixas, Requejo → Requeixo などがある。旧書記法の <j>, <g+e, i> の使用はカスティーリャ語であり、カスティーリャ語の音素 /x/ 軟口蓋摩擦無声音を表している。ガリシア語の音素 /j/ 後部歯茎音を表すために書記素 <x> を使用する。歴史的な書記法は継続しないとされた。

・旧書記素 <y> は <i> に改める。Rey → Rei, Noya → Noia, Naya → Naia, Gayoso → Goioso, Mayo → Maio, Romay → Romai などである。旧書記素の保存は、たとえ半母音であっても発音の変更は生じない。母音間にあるときも、異なる音素を導入しても発音の変更はない。したがって中世の伝統に則る書記素であっても、ガリシア語の現行書記体系に影響を及ぼさないが、これらの旧形態は標準語としては受け入れられない。

1.2 現行の書記法にそぐわない名字について

書記素を変えることにより発音の変更が生じる場合は、現行の正書法を薦めるが義務ではない。書記素の変更がカスティーリャ語化に連なることを危惧する。名字が引き起こすガリシア語の語彙を無視することから統一化することである。

・語源的に , <v> の場合。

Baamonde < Badamudus < 地名 *ゲルマン語 badu 戦い + mundus 防御 (*Bahamonde, *Vaamonde, *Vahamonde), Nabeira, Bieites, Biqueira, Beiras と Vello, do Vao = Dovao, do Val = Doval, Corvacho, Vasalo を遵守する。

・語源的でない <h> の場合。

Ermida (*Hermida と表記上書かれる), Ermo (*Hermo), Ermelo (*Hermelo), Baamonde (*Bahamonde) などの名字には語源となるものが存在しない。

1.3 アルカイックな書記法の特例採用

中世の書記法が維持されている場合。Boo, Rioboo, Saa, Saavedra, Caamaño などのような 2

つの同じ母音が連続して、-n-, -l- が脱落している特例がある。

ここで『ドン・キホーテ』の作者 Miguel de Cervantes e Saavedra について考えてみたい。この 2 つの名字は明らかにガリシア人のものである。名字 Cervantes は地名である。Moralejo Lasso 教授によると、語尾の -antes はガリシアに存在する Arantes, Barbantes, Barrantes, Cesantes, Nantes, Ourantes などのように集団を意味する。Cerv- は種族または民族を意味し、ガリシア東部のアンカーレス山塊に住んでいた種族が地名そして名字になった。ラテン語の *cervus* ケルプスという地名とも関係し、ガリシア語の *cervo* セルポになった。印欧語 **ker-és* 「頭、額または角」の意味。この語はギリシャ語 *keros* を經由して、ラテン語 *cervus* が形成された。おそらく、Cervantes セルバンテスの種族は三世紀ガラエキア時代の語で「頭が固いまたは大きい人間」または「動物の角を装飾」したと考えられる。Saavedra はガリシア人の名字でとても興味深いものがある。ゲルマン語起源 **sal* 「広い場所」とラテン語の形容詞 *vetera* 「古い」により形成された名詞である。711 年以前に記録されている。ありふれた名前 *saa* があり、形容詞 *vedra* は類義語 *vella*, *vedraia* によって代替されたのであろう。したがって Saavedra は「柵で囲まれて土地、または旧領主の建物」という意味である。同様に Miguel の母は Leonor de Cortiña または Cortina であり、ガリシア人の名字である。Cortiña は「柵で囲まれた土地、家に隣接した土地」を表し、ラテン語起源の語である。すると、Miguel de Cervantes の母の先祖は、Cortiña の何某と呼ばれたガリシア人の匿名かもしれない。そしてその匿名が名字になったわけである。

2. 語の分節

前置詞と冠詞が結合している名字の場合。多くの場合は地名に由来する形態で、前置詞と冠詞が結合して温存される場合がある。実際、前置詞は消失する傾向にある。Silva, Vila, Fonte, Campo, Rego などがある。書記法上結合した場合は Daviña, Dafonte, Dorrego, Doval などであり、分離した場合は da Silva, da Cruz, da Cuña, do Campo, do Souto がある。

3. 方言的変異

地名についても同様に *Nomenclátor de Galicia* 2003, Xunta de Galicia 『ガリシアの地名一覧表』に従い、方言的な変異を尊重する。ただし、ガリシア固有の形態であること、中世に証拠があることである。このような場合は、2つ名字の表記が許容される。Fontán / Fontao, Louzán / Louzao, Morás / Morais, Casás / Casais, Currás / Currais, Pedrouzo / Pedrouso, Eiriz / Eirís, Liz / Lis, Romariz / Romaría, Eiras / Airas, Fol / Fole, Val / Vale などである。

4. カスティーリャ語化された形態を元の形に戻す

16世紀から政策によりカスティーリャ語化された形態の名字は約16%ある。これらの社会的インパクトは大である。言語的混成形を元の形に戻すことである。すなわち *Teijeiro → Teixeiro, *Seijas → Seixas, *Montoto → Montouto, *Goyanes → Goiáns, *Cividanes → Cividáns, Penabad → Penabade などがある。

さらに語彙形態の Neto, Dourado, Romeu, Mosqueira などあげられるが、この場合はガリシアの外から移入した人々の名字であることから留意する必要がある。本来ガリシア語の形態のカスティーリャ語化を戻したことになるからである。また多くの地名が土地の名前として標準語形で表わされているが、歪められた名字を引き続き使用している場合 Buxán, Baxa, Vilar, Castelo, Triñáns, Rubiás, Bustabade のようなパドックスがあることも否めない。

人々の生活のなかでガリシアの名字が家族のなかに残存し耐えている場合、すなわち、Outeiro, Martís のような渾名として考えられている場合と、公文書にカスティーリャ語化された形態 Otero, Martínez が記載されている場合がある。重要なことは、カスティーリャ語の形態を変えるのではなく、登記簿に純化された正しい形態を回復し銘記することである。

おわりに：名字はアイデンティティ

名字はアイデンティティの証である。しかし人名とは異なる性質である。名字は選択するのではなく世襲的に用いられる。アイデンティティ

イとの結びつきは、人名とは異なるものである。家族そして広い意味で古い社会との関係がある。したがって名字は家族を繋ぐものである。父称は父親との人間関係を示し、社会経済的とくに職業集団のような構成を世代間での関係を繋ぐものである。共同体は人物の特徴を示し、物理的かつ精神的なものであり、その出自または在所を表す。「名字は私である」という個人的アイデンティティの表現を構成する。

西欧世界では、1980年代からグローバリゼーションと個人主義のプロセスとともに名字のあり方に変化が生まれた。しかしガリシアでは多くの場合、名字の起源に地名と関係している。

Cartografía dos apelidos de Galicia (CAG), Instituto da Lingua Galega. ガリシアの名字地図 <http://ilg.usc.es/cag/> (consulta na primavera, 2022) を見てわかるように、名字は地名に源を発するように分布している。例えば、個性的な名字の Carballude (262人、櫛コナラ、櫛カシの木からの派生語)、Abonxo (47人、前印欧語の水を意味する)、Isorna (212人、前印欧語の急流を意味する)、Cardama (351人、植物の名? Carda+ama)などはポンテベドラ県とア・コルーニャ県の周辺地域に見られる。地名に由来する多くの名字は高い比率で歪められた形態を表し、復活した形態は実際には排他的形態である。こうしたことからガリシア語本来の名字の形態が求められよう。名字は、社会変化にともなって変わることを意味する社会的アイデンティティの表れでもある。

Bibliografía

- Bascuas, Edelmiro (2014): *Novos estudos de hidronimia paleoeuropea galega*. Universidade de Vigo.
- Boullón Agrelo, Ana Isabel (2009): «Sobre a estandarización da antroponimia proposta para os apelidos», *Boletín da Real Academia Galega*. Núm. 370, 117-152.
- Boullón Agrelo, Ana Isabel: (2021): *Todos os nomes: identidade, pobo, país*. A Coruña, Real Academia Galega.
- Cabeza Quiles, Fernando (1992): *Os nomes de lugar*. Toponimia de Galicia: a súa orixe e o seu significado. Vigo, Xerais.
- Méndez Ferrín, X.L. (2007): *Consultorio dos nomes e dos apelidos galegos*. Vigo, Xerais.
- Navaza, Gonzalo (2012): «A grafía do fonema prepalatal fricativo xordo en topónimos e apelidos galegos», Universidade de Santiago de Compostela, *Estudos de Liniística Galega*, 4, 169-185.
- Real Academia Galega (2016): *Os apelidos en galego. Orientacións para a súa normalización*. A Coruña, Real Academia Galega.

(浅香武和・本学非常勤講師)